

heisei16

六花

Rikukwa haikukai

7

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho
風 ohdako no orikite kusa no iro to naru
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryouyaku ni

designed by Asuka

訪
戴



山田六甲

凌霄花のうぜんのこぼれて子には故郷なる
足下のまだ明るくて蚩狩
亀鳴くと足湯に長居してしまふ
祝鯛下げて友来る黴の庵
像法は天あま翔かけてゐし蝸牛
蝸牛笑つて済ますほどの疵

死ぬまでは生きて句を詠む蝸牛
噴水の急にこときれたる音す
荒梅雨や海が地球にへばりつき
傘さして字を書いてゐる合歡の花
曼荼羅華口を開けずに笑ひけり
梅雨明けし紙の破れる音がして

貝森光太さん句集『八重田』出版を祝い

みちのくの七重に八重に青田風

五体投地

松 山 律 子

道おしえ俺の行く先知ってるか
人の世の無情を知って余花である
墓石に五体投地の瑠璃蜥蜴
八つほど病名もろていざ夏を
燃え上がれ迎え火父母はすぐ其処に

露の臺

二 瓶 洋 子

斑雪山移ろうてゆく雲の影
春なれや金星うるみ遠からず
垣外の人に摘まるる露の臺
形少し変へて動かぬ春の雲
涅槃絵を掲げ追悼茶会かな

休診

鳴 海 清 美

休 診 の 札 旧 り 雨 の 雪 柳
春 光 へ 紛 れ バ ド ミ ン ト ン の 羽 根
シ ー ソ ー の 相 手 の を ら ず 黄 沙 降 る
野 遊 び や 過 ぎ た る 雲 の 影 い く つ
春 眠 や 写 真 抜 け き し 夫 の 背

雲の峰

中 村 房 江

星 合 の 石 ひ ろ ひ を る 袂 かな
水 面 暮 れ 梢 暮 れ け り 鱧 落 と し
夕 座 敷 扇 子 た た め ば 東 山
庭 下 駄 で 入 る 厨 や 夏 椿
友 達 は 男 に し か ず 雲 の 峰

花筏寄せ集まりて陳腐なり

西塚 成代

幼な児の手から逃げ去る花吹雪

欠伸せし目の捕まへし冬の蝶

花冷えに疲労困憊ジャズ喫茶

花見酒酒飲む人と笑ふ人

花筏が寄せ集まったら陳腐であるという主観の強い句だが、なるほどそうかもしれないという同感の働きが起こって綺麗、風情、無常などと情の世界にひたっている我々に、冷や水をかけられたような。ドキッとさせられるようなこのような俳句が生まれてきたことを喜ばなければいけないだろう。平凡・陳腐という言葉を駄句にあびせかけてきた我々に今度は陳腐という言葉でせまってきた。

橙木集



ヨーヨー

梶浦玲良子

トーシューズ帰雁の空を漂へり
すりこ木のほのかな温み御水取
ヨーヨーの力尽きたり糸柳
誰に見せたく春虹の身を反らす
縦糸の修羅をくぐりて水草生ふ

春眠

志方 章子

春色の兵庫大仏うひうひし
虻の打つ清盛公の広き背
借景の花見してゐる二階かな
磨硝子越しにもあれはシクラメン
春眠の 暁 覚 ゆ 齡 かな

以下五十音順送り

松の芯

池崎るり子

巢立鳥たたまれてありパイプ椅子
前列の空席目立つ花の冷え
初蝶の猫の頭をすれすれに
永き日や人質解放アラブ文字
松の芯十六歳の誕生日

桜
市川伊團次 花

小田 元

還暦や雨を降らせて花八分
掌に花一枚の震へをり
花の木に花を咲かせて妻笑ふ
仰ぎ見て桜の上の桜かな
せせらぎを聞きぬて妻と春惜しむ

ブルカ脱ぐイロハ紅葉の新芽かな
バラの芽のドームの向う隣立つ
のどかさの風力発電西を向く
花の山一筋白き煙立つ
花吉野桜の下も桜かな

倒産

岩松 八重 空の涯

貝森 光大

倒産のニュース聴きつつ雛納む
釣人の雪解け水にたるる糸
つくしんぼちよつと真面目に挨拶す
タクシーの遠廻りして花見かな
花びらを敷きつめし道ゴミ捨てに

囀れば囀り返して空の涯
のほほんど風呂上りの貌夕蛙
蛤の分相応の水を吐く
もらい物のように春愁ふところに
生命線去年と違う四月馬鹿

六花集

会員自選

中谷喜美子

新学期鍵を忘れて行きにけり
串団子ひとり一本花曇り
つつましき母の食卓夕桜
前向きになれと人には啄木忌
釣人を邪魔して桜散りにけり

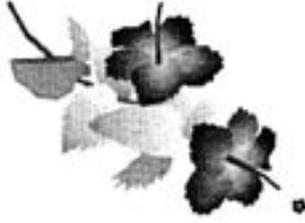
林 裕美子

山の狸

うららかやハンゲル文字の理髪店
カメラなき軽さ悔やめる花見かな
家族ありて夕餉のしたく春の空
春なれば春色の服みなど町
フリージアの香に誘はれて路地の奥

夕闇に黄泉の戸開き亀の鳴く
朝焼けの朱きを吸ひて桜咲く
花枝に攻められてをり天守閣
紫木蓮なかに抱くは花の精
春の蚊のひたすら宙を飛んでをり

菜根譚



六甲

家族ありて夕餉のしたく春の空

林 裕美子

家族があるから夕餉のしたくをするのはしごく当たり前の、日常的な営みなのだが、改まって、文字にすれば「家族ありて」に重み加わるのだ。夕餉の支度ができる喜びとも、ああ、また夕餉のしたくをしななければいけないか、と義務的に憂鬱な気分がもたげてくる感情なのかは、読者が受け取ることである。この句の佳さは日常のなかに潜んでいる詩を掴みあげたところにある。

前向きになれよと人には啄木忌

中谷喜美子

前向きでないのは実は自らであって、人に言うことよって自らを鼓舞しているのである。その心理を客観的にのべているところがミソだろう。ところで、啄木は歌に詠んだようなイメージとはほど遠い人物だったらしい。人格と作品は別であったのだ。今だったら世間から袋だたきにされて歌壇からも排除されたにちがいない。人格がどんなであれ後世には作品だけが残つていくのだから、ゲイジツカは得なのだ。